

「青い吹く」

下中郷土カルタ指導者用解説書



南種子町立花峰小学校
第四十三代校長 鬼塚秀樹著



『り』竜宮へ続く水井戸浜の色【大牟田汐入にある水井戸】

はじめに

花峰小学校では、毎朝8時15分から朝の活動と呼んでいる全校集会が行われます。内容は、下中郷土カルタの暗誦、校歌斉唱、曜日ごとに異なる学校自慢の暗誦等です。

本書では、この朝の活動で全校児童が唱える下中郷土カルタについて、その意味を解説していきます。平成の初期から暗誦し続けられてきた下中郷土カルタの中で、使われている言葉の意味や、その背景となる郷土の歴史・文化について、指導者の皆さんに理解して欲しいと願って始めた作業です。そして、これを読んだ指導者の皆さんのが、ご自分の言葉で子供たちに語って聞かせていただきたいという願いも込めてお届けしています。

下中郷土カルタは、平成3年4月から平成7年3月までお勤めになられた、本校第33代校長、牟田島孝男先生が編み出された定型の45句です。今から30年以上の前の前のことですが、先生は、時間を見つけては校区を散策したり、高齢者のお宅を訪ねて、校区の歴史・文化・芸能についてお聞きになつたりして、その知識を蓄えておられたそうです。このようにして作られたのが下中郷土カルタなのです。

折しも、南種子町が進める宇宙留学制度の開始時期とも近いことから、地元の子供はもちろん、他県等からの留学生にとって、第二のふるさとを実感できる貴重な教材となっています。

このカルタは、暗誦という形で子供たちに親しまれ、郷土愛や母校愛を育てる役割を果たしてきたことは言うまでもありません。実際、かつて留学生だった方から、30年経った今でも全てを唱えることができます。という嬉しいお便りを頂戴することあります。

このように、今や花峰小学校にとつてはなくてはならない、宝物として存在する下中郷土カルタですが、実は一点だけ困ったことがありました。それは、子供たちがカルタの意味を理解しきれていないということです。子供たちは、このことを解消するために、総合的な学習の時間の中で、意味を調べたり報告書を作つて発表したりしているのですが、種子島特有の固有名詞や、校区内の限定的な地名はインターネットを駆使しても調べることができないのです。

これは何とかしなければならない。そう考えて、郷土誌等を読んで調べたり地域の方々への聞き取りを行つたりしました。本書が、牟田島先生の御意志に通じたとは申しませんが、先生の願いに少しでも沿うことができるとしたら大変光栄なことと存じます。

目次

あ	青田吹く南風にすくすく早期米
い	インギーを守り続けて一世紀・
う	海亀を守る情けが受け継がれ・
え	エビナ捕る子らに昔の知恵を貸し
お	沖合いの潮寄せつけぬ防砂林・
か	貝塚のあと一陣の浜ゆかし・
き	奇人めく山神どんの背負い石・
く	黒潮がどんとどろく前之浜・
け	健康な顔がそろつたゲート場・
こ	ゴムの木の庭で育つた母校愛・
さ	笹竹で済む里人のコセん釣り・
し	汐入りの地名が語る災害史・
す	健やかな子に育てよと蓬（ふつ）のだご・
せ	芹を摘む背にゆつたりと春の海・
そ	空焦がすほど燃え上がるハカマ焼き・
た	タケノコの味噌煮がうまい野邊のお茶
ち	茶請けには母の作ったツワんしめ・
つ	釣糸が光る川尻家族連れ・
て	手の届く枝にヤマモモ垂れ下がり・
と	泥かぶりつつ駄汲みにはしゃぐ声・
な	夏風もきらめき弾む磯遊び・
に	入学を祝う花峰山の木々・

【ぬ】塗り込んだ壁画は村の新名所・
【ね】根を張った芋へ一気に鍬を入れ・
【の】野に立てば産土囲む七つ峰・
【は】八幡に祈る小さな手が可愛い・
【ひ】ひつそりと木陰に眠る後々女塚・
【ふ】ふるさとの誇りは自然保護区域・
【へ】べた凧に門倉映る波の色・
【ほ】頬ばつて食うツノマキは母の味・
【ま】真所の由緒を聞けば政所・
【み】水鳥が遊ぶのどかな郡川・
【む】紫の旗に声援沸き上がり・
【め】巡り来る年幸あれと福祭文・
【も】森山に太鼓が響く田植え歌・
【や】優しさを見せて踊る子ヤートセー・
【ゆ】夕映えの中もくもくとオーギ刈り・
【よ】呼び合つて渡るマトリの家族愛・
【ら】落日ヘドラメルタン号悶ぶ・
【り】竜宮へ続く水井戸浜の色・
【る】瑠璃色の沖を眺める魚(いお)見原・
【れ】礼節の手本を示す年の功・
【ろ】六方を踏む弁慶のナタが冴え・
【わ】鰐口の音は確かに文化財・
【ん】運願い歌声そろうめでた節・

27 27 26 25 25 24 23 23 22 22 21 20 19 19 18 17 17 16 16 15 14 13 13

あ 青田吹く南風にすくすく早期米

2月も下旬頃になると、下中にも柔らかな風が吹き込むようになる。それ以前には島間や西海方面から吹き付ける北風のため、ここ前之浜では風もさほど強くなく、打ち寄せる波の音も集落まではほとんど届かない。

しかし、やがて東寄りの南風、すなわち東南風（こちばえ）に風向きが変わると、下中の米農家の家々では、苗箱の支度や苗床に使う土の準備に追われるようになる。そして弥生3月、一斉に植え付けられた早苗は、村人の期待に応えるように南風（ハエンカゼ）に吹かれてすくすくと成長し始めるのである。

い インギーを守り続けて一世紀

インギー鶏がここ下中で飼われ始めたのは、1894年（明治27年）。

前之浜に座礁したイギリスの帆船ドーメルタン号の乗組員を下中の村人が総出で救助した。それから船が出港出来るようになるまでの約2ヶ月の間、村人は各家々で食と住の面倒をみた。そのことのお礼として船長から贈呈されたのがインギー鶏である。

村人は、それから現在に至るまでの130年近く、種を混じらすことなくこの鶏を大切に育ててきた。

ここ花峰小学校では、昭和56年から校庭の一角に鶏舎を建てて教育の一環として飼育に努めている。

う

海亀を守る情けが受け継がれ

下中の南方、太平洋に接する一帯を前之浜と呼ぶ。この前之浜は東西2kmにも及ぶ砂浜海岸となつてゐる。

前之浜海岸は、悠久の昔からアカウミガメの産卵地となつてゐる。（希にアオウミガメが上陸することもある）

この地で孵化したウミガメは、幼く小さな体ながら懸命に泳ぎ、遠く離れた中米メキシコ沖にたどり着くと、そこで成獣になるまで過ごすのだそうだ。

そして30年の月日を待ち、本能に導かれるよう再びここ前之浜に辿り着くと、一シーズンに200個から300個ほどの卵を産み、また大海原に帰っていく。おそらくこの大自然の営みは、数千年、数万年の間、変わることなく続けられているのだ。

鹿児島県は、ウミガメの上陸頭数が全国で最も多い県であることから、ウミガメの保護を目的に1988年、全国で初めてとなる「鹿児島県ウミガメ保護条例」を施行した。これにより、南種子町内に2名の保護監視員が委嘱されており、条例の目的に沿つた活動をしておられる。

私たちの花峰小学校でも総合的な学習の時間に位置付けて、監視員の方から、ウミガメの生態や海洋ごみによる悪影響について教えていただいたり、海岸清掃活動や卵の移設体験活動をさせてもらっている。



え

エビナ捕る子らに昔の知恵を貸し

エビナとはボラの子のことである。ここ下中では、初夏の陽気のいい日に人々が集まってこのエビナ捕りを行っていた。また、この漁は、子供たちの川遊びとして趣味と実益を兼ねたものとなつていた。

どのあたりでしていたのかを地元の古参に聞いてみると、古くから郡川の旧河川で行われていたということだった。前之浜の東側で、郡川河口が砂で堰き止められた時が好条件であった。

エビナは、危険を察知すると水面高く跳ね上がる習性があることから、そうした場面を意図的に創りだして捕獲する。おののおの家にある戸板にわらをぶら下げて川面に浮かべる。河口の堰が切られると一気に川が流れ始める。すると、エビナは流れに逆らい上流に向かつて泳ぎ出す。その先には、障害物に見立ててわらをぶら下げた戸板が浮かべてある。エビナはわらに驚いて水面高く飛び上がる、そして着水しようとするところに戸板が浮かべてあるので、戸板の上に乗つてしまつて捕獲されてしまう。

近年、河川工事があり、郡川の環境が変わった後は、竹竿で川面を叩いて浅瀬に追いやり、そこに戸板を浮かべて待ち構えるといった方法がとられるようになつたということである。

昭和の頃には見られた光景であるが、平成初期の県PTA委嘱公開の折、ビデオ映像紹介のために行われたのが実際に行われた最後の機会だったようである。

お 沖合の潮寄せつけぬ防砂林

前之浜に隣接する防砂林は、その幅が数十メートルに及ぶ所もある。塩竈を設けたり、地引き網漁を行つたりと砂浜海岸の恩恵は確かなものであるものの、南東、南西の風による海岸砂の害は甚大であつたと推察できる。特に、弥生時代から稻作が行われていたこの地の人々にとって、塩害を少しでも和らげるために防砂林の働きは大変重要であつたようだ。

「荒南風（あらばえ）」「さ西北（さにし）」という風の呼び方も残っているが、これも下中地区特有のものではないだろうか。

か 貝塚のあと一陣の浜ゆかし

種子島には、遙か大昔から人が住んでいた。南種子町で最も古い遺跡は、島間にある横峯遺跡で、旧石器時代（約三万五千年前）に遡る。この横峯遺跡では、複数の時代の遺構・遺物が出土していく。最も新しい時期は縄文時代前期とされている。

一方、下中で最も古い痕跡は縄文人が遺した貝塚である。郡川の河口付近で合流している聞語川（きんごがわ）という川の東側、通称一陣ヶ浜と呼ばれている所にある。この一陣貝塚は、およそ6000年前から3000年前までの人々の生活痕跡である。正式には「一陣長崎鼻貝塚遺跡（南種子町選定文化財）」と命名されている。

発見されている物には、鯨の骨を加工した道具、ハマグリの貝殻を加工したやじりやオオツタノハ貝製の腕輪、焼いて肉を食したと分かる猪や鹿の骨などがある。

弥生期に稻作が伝わるより前の、狩猟生活をしていた原始時代へのロマンが広がる場所である。

き

奇人めく山神どんの背負い石

山神（やいがみ）どんの本名や正確な生没年は記録にないが、およそ350年ほど前に山神集落に住んでいたということ、墓石が近年まで集落内にあったということは記録されている。

山神どんは、どんちが利く大柄な力自慢の男性であつたそうである。山神どんのどんち話や力自慢話はたくさん残つてゐるが、この石にまつわる話は、山神どんの生涯最後の話として語り継がれてゐる。要約すると、山神の人たちが本善寺に供養塔を建てるため、山から石を引き出そうした。しかし、石が大きすぎたため繩が切れるなどしてなかなか作業が捗らない。そこへ、山神どんがやってきて、一人で石を抱いで運び、無事に本善寺に納めた。しかし、その時にいた肩の傷から破傷風を患い、命を落としてしまつたという話である。その山神どんが背負つて登つたと言い伝えられている巨大な石が、本善寺に今も遺つております。言い伝えと共に下中の人々の心に留まつてゐるのである。

山神どんのとんち話は「南種子町地名研究会」刊行の「ふるさと南種子に生きる昔話」山神どんの話に収録されている。（南種子町郷土館に収蔵されている）

黒潮がどんとどろく前之浜

下中から西に進み、本村集落から門倉岬に登る途中にある七色坂展望所から眺める前之浜の景色は絶景である。太平洋の遙か彼方で生まれた波は、黒潮の流れと相まってここ前之浜にたどり着く。時には小さいざざ波が、時には大きく高波で、さらには台風による波濤となつて打ち寄せるのである。

この波濤が打ち寄せたときの波音は、海岸から数百m離れた山神集落に居ても大きく轟いて聞こえるのである。大自然の雄大さを感じる瞬間と言える。

け 健康な顔がそろつたゲート場

下中の高齢者集団は、その名も「老盛会」。

みなさんとにかくお元気である。それぞれのご自宅のカレンダーに記されたゲートボールの練習日は、5の倍数の日と決められている。

和氣あいあいと、ゲートボールを楽しみ、お茶と黒砂糖で中休みをし、そしてまたゲートボールに打ち込む。

近くを通りかかると、湯飲みと漬物がさつそく手渡され、笑い声の中に混ぜてもらえる。とても素敵な余暇活用であり健康づくりである。

こ ゴムの木の庭で育つた母校愛

校庭にあるゴムの木は花峰小のシンボルツリー。
子供たちが毎朝唱える学校自慢の水曜日版に「大きなゴムの木」というのがある。

大きな大きなゴムの木は 地面にしつかり根をはつて
空にぐんぐん枝広げ 百年以上の昔から

毎日元気に伸びてきた 枝にはロープのぶらんこが
下にはベンチや木の根っこみんな遊べと待っていた

おじいさんの昔から 花峰の子を遊ばせた

今は三代目ゴムの木よ 元気に大きく伸びてくれ
ゴムはみんなの宝物 花峰小の自慢の木だ

さ 笠竹で済む里人のコセン釣り

コセンとは、ヒラアジの仲間。種子島近海で釣れる魚で、西之表ではエバ、中種子、南種子ではコセンと呼ばれている。

夏の猛暑が過ぎ、海水温がやや下がった中秋の頃からコセン釣りを楽しむ人が前之浜に現れ始める。

群れで移動するので、タイミングが合えば30分程度で大きなバケツ一杯分もの釣果がある。また、潮の干満によつて郡川を遡上するため、安全な川岸にて手製の竹竿を使ってコセン釣りを楽しむ子供の姿は、今も昔も変わらない。

し 汐入りの地名が語る災害史

過去数百年の歴史を見ても、下中一帯にわたつて津波などの大災害があつたという記録は無い。それでも、里集落から真所集落の南側に広がる田園地帯に「汐入」という言葉が小字に付けられているのには意味があるのだろう。人命を飲み尽くすほどの災害ではなかつたとしても、高潮の影響が度々あつたと想像できる地名であり、備えを怠らないようにという先人の教えである。

以下は、下中に存在する「汐入」と名付けられた小字。

郡川の東側に、下聞語汐入、郡川汐入、郡川の北側に、和島汐入、大平下汐入、平の瀬汐入、郡川の南側に夏田牟田汐入、上千汐入、松門汐入、大牟田汐入、長迫汐入、浜田汐入、小牟田汐入、大角汐入、浜鹿角汐入、無田汐入、深田尻汐入、東真所汐入、西政所汐入、堀切汐入、宮田汐入、汐入と続く。

す

健やかな子に育てよと蓬（ふつ）のだご

「ふつ」とは「蓬」と書き、文字どおり「よもぎ」のこと。「だご」とは米粉で作る「だんご」のこと。3月から5月にかけて、鮮やかな若草色に萌える若芽から漂ってくるのは、まさに春を感じさせる爽やかな香りである。

この頃の若芽を摘んで団子に混ぜると色鮮やかな「蓬のだご」が出来上がる。
現代における子供のおやつと言えば、菓子パンであったりアイスクリームであったりが主流であるが、かつてのおやつと言えばこういった物が定番だったわけである。
令和になつた今日でも、学校の田植え体験学習の日には、校区にお住まいの“昭和のお母様”から「蓬のだご」の差し入れが届けられる。
古き良き時代の素敵なお土産である。

せ

芹を摘む背にゆつたりと春の海

芹とあるが、ここで詠まれているのは「浜芹（ハマゼリ）」のこと。
春の訪れを感じさせられるのどかな日和の中、浜芹を摘んでいる向こうには、さざ波寄せる海岸
が見え隠れする下中の一風景。
平成16年に改訂された南種子町自然保護条例により、浜芹の採取が禁止されたため、それまでの時代の風景を映し出した懐かしい一場面ということになつてしまつた。
ハマゼリの味を懐かしむ地元の主婦に話を伺うと、摘んで持ち帰ったハマゼリを、さつと湯がくと鮮やかな紫色になり、とても美味しいおひたしになつたことである。

そ 空焦がすほど燃え上がるハカマ焼き

「ハカマ焼き」とは、オーギ刈り作業の一工程に名付けられた言葉。オーギとはサトウキビのこと。オーギは、出荷の際に葉を削ぎ落としたり茎の長さを揃えたりする。この時に畑に散乱している葉や茎を一ヵ所に集めて火を付ける。乾燥した葉や茎は勢いよく燃えかかり、空焦がすほどと表現されている。

実際には、高く燃え上がる火柱と同時に、辺り一面を覆うほどの白煙が広がり、さらに、パチパチという音も周辺に聞こえてきて、季節を感じる風物詩とも言える光景が生まれる。ただ、近年は、野辺の火災につながったり、煙の害などを心配して一ヵ所に集めて燃やす方法はとらず、畑に広げたまま小さな炎で燃やすようになつてきている。

た タケノコの味噌煮がうまい野辺のお茶

種子島に自生している竹は、種類も数も豊富である。先人は、季節ごとに生えてくる様々な種類のタケノコの味を、折々の季節ごとに楽しんできている。春先から順に、もうそう竹、こさん竹、ちんちく、にが竹と、春から秋にかけてその味覚に出会うことができる。このほかにも種子島には緑竹、唐竹、や竹といった珍しい種類の竹も生息していると聞く。

各々の農家では、収穫したタケノコを、出汁、みそ、砂糖と共に煮込んで、農作業の合間のお茶請けに食していたようである。

ち 茶請けには母の作つたツワんしめ

ツワんしめも農作業の休憩時間に食されていたお茶請けのひとつで、いわゆる煮しめのこと。季節は春、野辺に生えるツワブキを摘んできて、たけのこ、こんにゃく、あげどうぶ、こんぶ、しいたけ、にんじん、だいこん、とりにく……これらを出汁と一緒に煮込み、醤油、砂糖、みりん、酒、塩で味を調え、食材に味が染み渡ると完成。煮しめは、家庭ごとの味付けがあり、お茶請けにも、夕飯のおかずにも最適の故郷の料理である。

つ 釣糸が光る川尻家族連れ

漁港を持たないここ下中でも、稻の収穫を終えた農家の人々が、友人とあるいは家族で浜に出かけでは、思い思いの仕掛けで釣りを楽しんでおられる。満潮時ともなれば郡川河口から遡上する魚もいるので、川岸からの釣りも楽しめる。かつては、シンプルに籠竹に釣り糸と釣り針をつないだだけの道具で楽しめたことから、子供たちも釣果を競っていたようである。

て手の届く枝にヤマモモ垂れ下がり

花峰山の麓から上中地域にかけての雑木森の中には、ヤマモモが採れる果樹がある。スーパーもコンビニもない時代、子供たちは山に分け入っては季節の果実をもいできて、先輩、後輩で分け合つて食べたものである。

もちろん、収穫できる果樹のありかや食べられる時期については、年長者から代々引き継がれているので、その大切な情報が途絶えることはなかった。

残念なのは、こうした昔ながらの遊びや縦社会の絆が時代と共に失われてきていることである。

泥かぶりつつ鮒汲みにはしゃぐ声

「鮒汲み」とは、集落内の川で伝統的に行われてきた子供たちのための遊びの一つである。

小川や用水路の上流と下流を堰き止め、そこに溜まっている水をバケツでくみ出すと、行き場を失ったフナやカニ、エビ、ウナギなどが手づかみで捕獲できるというものである。
下中では、郡川の支流の一部を大人たちがせき止めて準備し、子供たちは歓声を上げて魚を追いかける楽しい一時となっていた。

な

夏風もきらめき弾む磯遊び

ここで言う「磯遊び」は農家の人々が初夏（田植えが終わった頃）や秋口に磯に出かけて、磯の産物を収穫する遊びのこと。現代ならば、朝一番のトッピーに乗って、家族で動物園に出かけようとか、今日一日は、温泉にゆっくりかかる日にしようといった骨休めの日を設けるところであろうが、昔は、貴重な行楽行事であった。（奄美地方でも、初夏の大潮の干潟に出て貝捕りを老若男女で楽しむ「浜下れ（はまおれ）」という風習がある。）

気候の穏やかなこの季節、寄せる波も大変穏やか。そんな日に、親子で磯に出かけて新鮮な海産物を収穫し、家族団らんで成果を喜び合うとともに、笑い声と共に一日を振り返る。そんな楽しい食卓が目に浮かぶ。

に 入学を祝う花峰山の木々

花峰小学校の創立は、明治12年10月28日となっている。学制の發布を受けて、下中小学校として発足した当時の児童数は6人だった。（後に校名は花峰小学校に改められる。）

以降百四十余年、児童数が最も多かったのは昭和34年の151人である。

江戸時代は御仮屋が置かれていたこの地（小字花峰）に校舎を建て、これまでに1380人ほどの入学生を迎えてきた花峰小学校。その全てを見守り続けてきたのが学校の西にそびえる花峰山である。

花峰山の木々は、子供たちの体力づくりや植物採集の学習の場を提供し、ずっと見守り続けてきた山なのである。

ぬ 塗り込んだ壁画は村の新名所

昭和後期の一時期、学校敷地内のブロック塀やコンクリート壁に絵画が描かれた。

高学年児童による卒業記念制作として受け継がれたのであろう。ド・ラ・メルタン号漂着の場面や、ゴムの木に登つて遊ぶ姿や運動会で活躍している様子が生き生きと描かれている。

壁画の傍らには、制作者の氏名が添えられていることから、卒業してからも懐かしく鑑賞できる記念品となつてゐる。

平成時代に入つてからは、畳大ほどの板材に学校生活の一場面を描き、壁画と同じように卒業記念作品として体育館内に展示されるようになつてゐる。

ね 根を張つた芋へ一気に鍬を入れ

種子島で甘藷(芋)の栽培が始まつたのは、一六九八年(元禄11年)種子島久基公の時とされている。全国的には、薩摩国から広まつたのでサツマイモと呼ばれているが、薩摩国では唐の國から伝わつたとされるので唐芋と呼ぶ。種子島に伝わつたのは、琉球国から琉球甘藷と呼ばれていた物であるため、甘藷(かんしょ)と呼ばれている。

収穫の秋(晚秋)になると、甘藷農家は家族総出で収穫に追われる。ひと夏の間、保たれた畝に斜め横から鍬を深々と差し入れる。すると、大きく実つた芋が姿を現す。長い畝を一鍬一鍬入れて進む作業は大変な重労働であった。しかし、それは同時に収穫の喜びでもあつた。

現代では機械の改良が進み、トラクターの後部に専用の機材を取り付けて一気にすくい上げながら前進すると、地中の実りがゴロゴロと姿を現す。花峰小の子供たちは、その後からついて行き、袋に収穫していくといった体験をさせてもらつてゐる。

の 野に立てば産土囲む七つ峰

産土囲むというのは、靈験あらたかな気に包まれた、と解釈する。

ここでは七つ峰とあるが、地元では七つが峰と呼ばれている。七つが峰の場所は、

●八幡神社の【御神体が祀られている山】

●お宮の南にある【森山】

●本殿の東に位置する【辺田の峰】

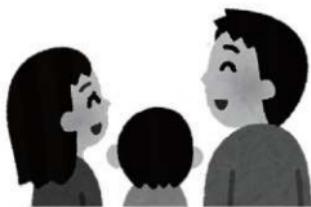
●本殿の西に位置する【モンダンの峰】

●久保ガ字の峯【クンガラン峰】

●暗渠（アンキヨ）の曲がり角の峰【岩瀬戸】

●森山の西の田中にある森【しんぶち森】の七つとされている。

「野に立てば」とあるが、はたしてどこから眺めているのか。「モリヤマ」も眺めているので、か



は 八幡に祈る小さな手が可愛い

下中八幡神社の例祭

7月上旬（旧暦6月15日）・・・六月灯（夏越祭）

10月下旬・・・大祭前夜祭（通夜祭）

10月下旬（旧暦9月15日）・・・願成就祭

12月中旬（新暦12月15日）・・・例大祭

12月31日・・・年越祭

1月1日・・・元旦祭

2月初旬・・・種穂祀り（潮祭）

3月初旬・・・御田植祭

例祭の中であげられる祝詞には、地域住民の安全祈願、豊年祈願、そして花峰小学校児童の健康安全に関する文言も編まれている。六月灯では、育成会活動で制作した灯籠が飾られ、御田植祭では田植え歌の披露をさせてもらっている。このように、村が一つになつて伝統を受け継いできた社の行事を共に守り、祈つている子供たちの姿を写した言葉と言える。

【下中八幡神社の由来は以下のように伝えられている。】

鎌倉の時代、種子島初代島主平信基が下島に当たり、海上安全・武運長久を祈願するため鶴岡八幡宮及び武藏国児玉郡二宮村鎮座の天照大神宮の御靈を分霊し迎えた。また、森山の周囲からは弥生式土器片が出土しており、元来は稻作神として創建されたと思われ、この森山は開田以来豊作祈願をした田の神山の原初形態ではないかといわれている。

ひ ひつりと木陰に眠る後々女塚

後々女塚とは「後々女の墓」のこと。真所の浜の里神社にて集落の氏神として祀つてある。(浜の里は真所集落の古名)

後々女は地元民から「ごんごじょう」と呼ばれていた女性である。生没年は不詳であるが、鉄砲伝来時の島主で、種子島家第14代時堯の寵愛を受けた(側室となつた)と記録されているので、1500年代中頃の人物であろう。後々女は真所八幡宮の祭主であつた古市長門の守の娘であり、美しく氣立ても良くて中之村では評判の娘であつたという。

後々女は、村のことを親身に考える女性でもあつた。天災などにより米の収穫が芳しくないときは年貢の減免を願い出たり、時堯公から貰つた水田を集落に与えるなどして人々に尽くしたといい伝えられている。その恩に報いる為、祠(浜の里神社)を建てて祀られている。

なお、「ごんごじょう」とは、種子島弁でヤドカリのことであることから、時堯公お見えの際以外は外出することもなかつたことから、村人がその姿を見る機会もなかつたため、ニックネームのように、そのように呼ばれていたのではないかとも言われている。

ふ ふるさとの誇りは自然保護区域

下中にある自然保護区域とは前之浜海岸のこと。
鹿児島県ウミガメ保護条例に基づき、貴重な野生生物であるウミガメが保護されている。また、ここでは希少植物となつてしまつて、ハマゼリの採取も禁止されている。

学校としては、春の一日遠足、下中自然保護活動での海浜清掃活動、ウミガメの放流といった活動で前之浜に出向く機会があるが、そのためこの美しい景観と貴重な動植物が存在するこの区域を誇らしく思えるよう教えていきたいものである。

へべた凧に門倉映る波の色

打ち寄せる波の大小により、海岸からの眺めに変化がある前之浜であるが、時には完全に波が止まつたような時間帯に出くわすことがある。

いわゆる凧の状態である。外海であるので珍しいことではあるが、浜から眺める大海原に突き出したように在る門倉岬は光に包まれ、波の無いみなもに映つて居るようさえ感じられる一瞬を、波の色と表現してあるのではなかろうか。

ほ 頬ばつて食うツノマキは母の味

かつては端午の節句などの祝祭日に必ずといってよくくらい作られていた食物に、ツノマキがある。ツノマキは、暖竹（イネ科の多年草）の葉っぱ2枚にもち米を包み、シチトウイ（い草の一種）の紐で結んだ物を3、4時間灰汁で煮る。葉の根元部分（茎部）が2本、角のように突き出る形になるのでこの名前がついている。

島主に上納しなければならない貴重なもち米ではあるが、節句や祭にかこつけてこれを作つて食べると伝えられている。

形から見て中国系の食物であろう。つまり、遣唐船がこの島に寄港していたということや、それ以外にも中國船が多数漂着していたという記録もあることから、種子島には古代から中国の食物文化に触れる機会があつたということが想像できる。

現代でもトンミー市場等にツノマキは売られており、手に入れることが容易ではあるが、素朴な味ゆえに子供たちが好んで食べるということは少ない。ただ、子供時代のおやつを懐かしんで買いたり、自ら作つて食べたりする方も少なくない。

ま 真所の由緒を聞けば政所

真所の地名由来については、以下の話が伝えられている。

中世の頃、領主の農事事務所がこの地にあった。役人が駐在して田地の管理に当たった所を政所（まんどこころ）と呼んでいた。そのマンドコロをマドコロと呼ぶようになったという説である。

このほかに、七つが峰、二重堀川という、いかにも神域にふさわしい土地を見つけ神社が拵えられた。種子島では、古来から真実性を強調する言葉には接頭語の「真」をつける傾向があつたため、この社を真所神社と命名し、加えてこの一帯を浜の里から真所と呼び変えたのだろうという説もある。



み 水鳥が遊ぶのどかな郡川

郡川を遡つていくと、夏田の牧ノ田という所に「夏田の石切場」と呼ばれる古い石切場の跡が見つかる。見上げるその石壁は高さ10メートル以上もあり、上部に「明治三年」の文字が太く刻み込まれている。江戸時代後期から明治初めにかけて郡川の護岸工事が施された。

また、里集落に下り、河口近くまで行くと、川の流れに沿つて区切られたように小字が仕切られている。実際、里集落の人々に聞くと昭和の中頃まで旧河川が集落内を蛇行しており、高潮の被害が少なくなかったようである。(里集落の古くからの言い伝えでは、蛇行する川の被害を防ぐことは、川に見立てた龍神を鎮めることであるという「龍神伝説」から、防砂林の先にある前之浜での十五夜の綱引きの際には、全集落民が二手に分かれて綱を引いた後、綱をとぐろに見立ててぐるぐると巻き、海に流していたという。) 弥生期以降、人々と密接に関わってきた郡川は、畏れの対象であり、恵みの対象でもあった。

現在では、護岸が整備され、サギやマトリやカワセミ等が遊ぶのどかな川となっている。

む 紫の旗に声援沸き上がり

花峰小学校のスクールカラーは紫色である。在校生は、入学や転入と同時に紫色のTシャツを購入し、全校行事などでは揃えて活動する。これに従い、小学校区対抗の町民運動会はスクールカラーの旗を準備し選手の応援をする。特に花峰小学校区の場合、年度初めに紫色のTシャツ購入を全校区民向けに呼びかけて買いそろえていただいている。

子供たちが着ているTシャツにはインギー鶏がプリントしてあり、インギーTシャツと呼んでいるが、同じデザインのシャツを校区民も着用するので花峰小学校区の応援席は紫一色となる。

め 巡り来る年幸あれと福祭文

福祭文（くさいもん）とは、種子島全島で受け継がれている正月行事である。集落ごとに受け継がれており、毎年1月7日の午後6時から行われている。

正月の神に代わって各家を訪れ、門口から福祭文を合唱し、その家の幸福と繁栄を祈つて祝う。その後祝いもちを頂いて帰る。最近は、祝いもちの代わりにお菓子や、果物、ご祝儀などを頂くことが多いくなっているようである。前年に不幸のあつた家には回らない。下中では、近年、山神集落のみ伝統が継承されていたので、小学生全員が参加させてもらつていたが、それも令和2年までで、現在は中断している。

【山神集落で歌われている福祭文】

ソーライヤ・ソーライヤ
イヨー くさいものじやソーロヨ
イヨー いつよりも今年は
イヨー 門の松が栄えた
イヨー 栄えたも道理よ
イヨー これにこそやソーロヨ
イヨー これも殿の身内に
イヨー 祝う物はなになに
イヨー 黄金花がすばーだ
イヨー 錢花が開いた
イヨー 開いたも道理よ

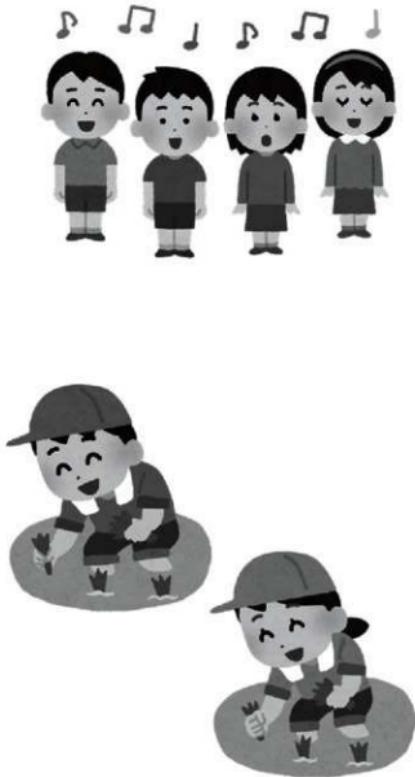
イヨー 東三条四条には白銀の森をつく
イヨー 西三条四条には黄金の山をつく
イヨー 四方の隅々に泉酒がたたえた
イヨー たたえたも道理よ
イヨー 白金のまげおけに黄金のしゃみしゃくで汲みた
ててーそーそーロヨ
イヨー ふつきまんぶく時あるとはみよ金かわせ給えよ
イヨー 烏鷺が飛び来て
イヨー 鶴と亀が舞い来る
祝う町のお祝いお米あれ

も 森山に太鼓が響く田植え歌

種子島内でお田植え祭が行われるのは、茎永（松原）にある實満神社の御神田と、下中（真所）にある八幡神社の御神田の二カ所である。八幡神社の祭りは、町指定文化財「下中八幡神社お田植え祭」とされており、毎年3月初旬に行われる。

真所の市ノ坪という小字に八幡神社があり、その南方に広がる田浦の中にある「森山」に隣接する御神田（オセマチ）で行われる。特徴は、ガマオイジヨウと呼ばれる老人が歌う田植え歌にあわせて社人のオイジヨウがお田植え舞いを奉納するところにある。

近年は、花峰小学校児童がこの田植え歌を任せてもらつており、2月になると学校で毎朝練習をする。子供たちにとっては難しい歌詞と節回しだあるが、皆よく練習し、太鼓の音と共に澄み渡る歌声を披露しては、地域の皆さんに喜ばれている。



や 優しさを見て踊る子ヤートセー

ヤートセーは、種子島各地に継承されている踊りで、一般的に口説（くどき）踊りと呼ばれ、奉納踊りの中では中踊りに属している。地域によつて服装や踊り方が少しずつ違つてゐる。踊りの隊形は一重円の隊列で、始終時計方向に前進しながら踊つていく。太鼓一人、鉦一人、入鼓一人、そして大勢の踊り子で踊る。花峰小学校児童は、夏休みから練習して、大運動会、町のふるさと祭り、八幡神社の奉納踊りに参加する。

踊りの所作の中で、前進を一時止め、外側を向き、左手を垂直に曲げ、右手を左のひじ付近に添えて、軽く両足を曲げる仕草があり、この瞬間のことを優しさを見せてと表現してあるのではないか。どうか。

ゆ 夕映えの中黙々とオーギ刈り

オーギとはさとうきびのこと、収穫する時期は、圧搾してオーギ汁を取り出し、砂糖を精製するために製糖工場を稼働させる期間に限られる。例年12月から4月がその期間となる。

種子島でオーギの栽培が始まったのは1825年（文政8年）頃と伝えられている。

現在では、機械化が進み、大型トラクターで一気に収穫するが、かつては大変な作業であつたそうである。畑にぎっしり植え付けられているオーギを一本一本手作業で刈り取り、葉を取り除く。順調に生育した年は良いものの、台風などにより倒されたり曲げられたりしたオーギを収穫する作業がいかに大変だったであろうか。「黙々と」とは、その様子を物語つている。

よ 呼び合つて渡るマトリの家族愛

マトリとは真鴨（マガモ）のこと。南種子町では、主に茎永（松原）にある寶満の池やその周辺の川で見かける。

マトリは渡り鳥。越冬のために10月頃にここ種子島を訪れ、4月にはシベリアに渡つてそこで繁殖する。習性を調べてみると、越冬中の、ここ種子島にいる時にパートナーを見つけ、春の渡りの時にはつがいで戻つて行くらしい。

マトリは集団で生活する習性から、数羽の群れで飛ぶ場面を見かけて「家族愛」と表現されているのかもしれないが、種子島で子育てをすることはないのでややニュアンスが異なる。また、同種のカルガモも南種子町にはいるが、こちらは留鳥なので、家族で飛んでいる場面に出くわすこともあるかもしれないが、カルガモのことはマトリと呼ばないので、ここでの言葉にはあてはまらない。

ら 落日ヘドラメルタン号偲ぶ

太平洋を臨む前之浜に居ても、夕刻はもの寂しい雰囲気になる。

西日が傾き、穢やかな沖合いを眺めていると、128年前にここに流れ着いたドラメルタン号の船影が見えるような気がする。

やがて再出発したとは言え、予定を大きく変更せざるを得なくなつた出来事は、きっと一大事であつたことであろう。

インギー鶏を介して、外国との不思議な縁が生まれたドラメルタン号の出来事ではあるが、少しだけ悲しみも湧いてきてしまう。

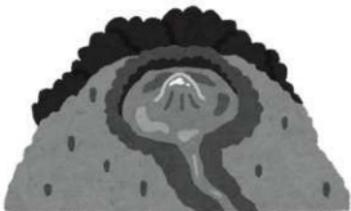
り

竜宮へ続く水井戸浜の色

里集落にある大牟田汐入の中のやや北寄りの地点に、昔から地下水が湧き出る所がある。これを地元では「水井戸」と呼んでいる。(方言ではミズイロと発音される。)大人にとつても子供にとつても、不思議な現象として捉えていたようである。現在90歳を超える古老に話を伺うと、「私が子供の頃から水井戸はあつた。私は祖母から、この水井戸は竜宮城につながっている。と聞かされていました。」と話してくださいさつた。

湧き出す水量が豊富であつたことから、地元では畑に施す水として利用してきた。

また、防砂林を南に抜けた海岸にも同じく水が湧き出ていた所がある。これを利用した別の話も伺った。それは、まず湧水を岩場に拵えた窪地に溜める。近くにある松の枝を燃やして石を熱し溜めてある水に浸ける。こうしてできた簡易の露天風呂に、漁で冷えた体を温めるために浸かつたという話である。これを人々は「瀬風呂(セブロー)のツボキ」と呼んでいた。



る 瑠璃色の沖を眺める魚（いお）見原

ここでは魚見原と記されているが、地元では昔から魚見鼻（いおみばな）と呼ばれていた。場所は、里集落の小字浜鹿角汐入の岸壁上部の丘あたりである。

季節は初夏、タツクリ（鯖の幼魚）が近づいてくる時期になると、魚見鼻から当番の見張り番が目を光らせる。やがて、沖合いにタツクリの群れが見える。見張り番はホラガイを使って集落に伝える。予め決まつた男が、サメよけ用の長い赤ふんどしを締めて海に飛び込む。男は、網の先端を持ち、大きく魚の群れを囲んで浜に戻る。ホラ貝の音に誘われて浜に集まつた人々は総出で網を引く。タツクリが文字どおり一網打尽に捕れる。その後は、見張り番の人が2人前、網張りの為に泳いだ人が3人前、陸で網を引いた人々が一人前ずつ、14歳以下の子供が参加したら半人前ずつと魚が分配される。少しでも分配を受けられるよう、大人も子供も何をしていてもホラ貝が聞こえたら浜に集合するようにと家族内で約束事とされていたらしい。

また、魚見鼻のやや北側の丘には、かつて恵比寿様を祀つた祠があつたそうである。生業として漁業を営む人はいなかつたとはい、安全祈願は怠つていなかつたようである。

禮節の手本を示す年の功

ここでは、年の功があるので年長者とのふれあいの中で、あいさつや振る舞いを学ぶ機会が多くあれば、やはり礼儀正しい対人関係が育つということにつながる。

花峰小学校では、交通安全教室、新入生を迎える会、消火器使用訓練、昔の遊びを習う学習、運動会、学習発表会等で「老盛会」の皆さんとのふれあい学習の機会を設けている。

子供たちにとつては、皆さんとのふれあいの中得るもの・学ぶことが大きいと信じる。

ろ 六方を踏む弁慶のナタが冴え

旧暦9月15日に八幡神社では秋祭りが行われる。実際には秋祭りとは言わず、願成就（ガンジョウジュ）という。春、一年の豊年満作の願が立てられ、この祭でその願の成就に感謝し収穫を祝うことから、収穫感謝祭ということになる。

元来、この時の祭礼樂として郷土芸能が氏子集落ごとに奉納されてきた。すなわち、

【里・山神】①さんご踊り②棒踊り③弁慶踊り④やーとせー（清左口説）

【夏田・郡原】①安城踊り②やーとせー（清左口説）③ひょうたんおどり④棒踊り

【真所】①安城踊り②源太郎踊り③やーとせー（清左口説）

ここで、里・山神集落が奉納していた弁慶踊りの一コマから、この一文が生まれている。

弁慶踊りは総勢21名で披露する。内訳は、弁慶役7人、牛若丸役7人、鉦太鼓役7人である。最初に弁慶の頭（師匠）がなぎなたを持って登場し口上を述べて舞う。続いて牛若丸の頭が口上を述べて舞つた後、戦いシーンの踊りへと続く。古式ゆかしく優雅で華やかでありながらも勇壮な踊りとなっている。

令和の現在、過疎化に伴い継承者の減少のため披露されることがなくなっているのは大変残念である。



わ 鰐口の音は確かに文化財

鰐口とは、下中八幡宮社殿前の軒下につるされる礼拝用の樂器の一種。青銅製の丸い形のもので、参拝者は、布の綱を振り動かして鳴らす。応永33年（1426年 室町時代）西野村の地頭であつた徳永祐丞（すけひろ）が、社殿を新しく建て直し、鰐口を寄進した。直径30センチメートル、厚さ8センチメートル重さ7キログラムあまりで、県内最大級の鰐口である。昭和42年鹿児島県文化財に指定されている。普段は南種子町郷土館に保管されている。

ん 運願い歌声そろうめでた節

めでた節は、結婚、出産、上棟等の慶事の祝い座や元旦祭、御田植祭等の神事の直会の場で歌われていた。酒宴において、宴だけなわともなれば、だれが始めるともなく歌われてきた種子島の古くから伝わる祝い歌である。

【下中地区で歌われているめでた節】

めでためでたの若松様よ
枝も栄える葉も茂る

峯の小松にひな鶴が
谷の巖なおらいで

亀舞い遊ぶ

なおもめでたの思うこと叶て
末は鶴亀
五葉の松



付 録

ここでは、128年前にイギリスの帆船ドラメルタン号が前之浜に漂着した一大事について当時の証言を元に残されている記録を再編集したものを掲載します。



皆さん、ようこそ花峰小学校においてくださいました。

わたくしは、本校校長の鬼塚秀樹でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

今日は、花峰小学校で飼育している鶏を見学においてくださつたとおっしゃいますが、なぜ、一地方の小さな小学校で飼われている鶏がこれほど注目されているかをお話しさせていただきたいと思います。

こちらの写真をご覧ください。これは、今から遡ること128年前、1894年（明治27年）4月25日

夜半に、ここ下中の南側にある前之浜に座礁した、イギリスの帆船ドラメルタン号の実際の写真です。

このドラメルタン号は、イギリスのリバプールを母港とする商船で、世界中を航路として航行していましたことが記録で分かつています。実際、この航行は、まず、1893年7月にイギリスを出港して、大西洋を渡つて、ニューヨークに行っています。その後、再び大西洋を横断し、アフリカ大陸の喜望峰をまわつてインド洋に出ます。そしてマラッカ海峡を抜けて、上海に到着します。上海には2週間程滞在し、食料などの物資を補充しています。そして、アメリカのサンフランシスコを目指して出航したのが1894年4月11日だったそうです。

そして、運命の日4月25日がやってきます。この日の種子島は朝から春の嵐に襲われていました。強い風雨が吹き荒れ、前之浜には一日中高い波が押し寄せていました。

しかし、夕方にはその強い風雨も弱まってきたということで、村の青年『はぶ かすけ』は「結い」の当番で塩焚き火の当番をして、夜も更けた午後11時ごろ、浜からわずかに離れた沖合に、花火が打ち上がるのを発見しました。花火に照らされたそこには、今まで見たこともない大きさの船が今にも横たわるうと傾いた姿で留まっていたそうです。その船は、幅が12m全長は81mあつたと言いますから、港を持たない下中の人にとっては、遠くに見ることはあっても、こんな間近に外国の船を見たのは初めてのことだったのではないでしようか。

これは、大変な事件だということで、かすけ青年は、真所集落にある公民館にたどり着くと、緊急連絡用のホラガイを高々と吹き鳴らします。何事かと集まってきた村の長老たちに事の経緯を話します。そして、そこで話し合われた結果は、若者3人を村の代表として船に向かわせ、どんな事情なのかを聞き取り

させ、必要であれば村人総出で救出しようとすることになりました。

かくして、かすけ青年を含む3人の若者が船に泳ぎ着き、たまたま乗り合わせていた中国人と漢字で筆談をして、この船がイギリスの商船で、嵐に遭つて座礁してしまった。船底も一部壊れてしまっている。ということがわかつたのでした。

そのことが伝わった村では、再び話し合いが持たれ、積み荷をおかに降ろし、船を浜にひきよせ、船を修繕してもらう。船がなおるまで、船員は集落で分担して宿泊させるということが決定したのです。

その話し合いの総責任者であり、乗組員を宿泊させたのがこの写真の才川周右衛門さんです。「困っちゃい時に、日本人も外国人もなかろうが。人ん 命い かえられんろ。助けえ 行かんばやなあ」と言われたといいます。

かくして船の積み荷は、下中、西野、茎永の3つの村から人々が総出でおかに下ろされ、小舟で帆船を曳き寄せられ、修理が進められました。

ドラメリタン号の乗組員は、才川周右衛門さんの他数名の家に分散して収容されました。

今風に言えばホームステイですね。初めて訪れた日本家屋では作法も分からないので、靴のまま家に上がると、イスがないので、床の間に腰を下ろして座つたということです。

そして、言葉が通じないことから、なかなかコミュニケーションもはかれず、初めのうちは打ち解けることができていなかつたそうです。しかし、こうしたものは今も昔も同じなのでしょう。ある時、浜で宴会がもたれたそうです。お互いに遠慮し合っていたところに、真所に住むある主婦が、恐れず話しかけていったそうです。その勢いに周りは驚いたり心配したりしたそうですが、結果として、それがきっかけで互いに笑いが湧き上がり、楽しい酒宴へと発展していく、その後の友好関係につながつたと記録されています。

また、あるとき、用意していた小麦粉が底をつき、パンが作れなくなつたそうです。それで、村人にパンの調達を頼まれたそうですが、そんなものがこの下中にあるはずもなく、思案の結果おにぎりを作つて届けたのだそうです。しかし、このおにぎりは全く評判が悪く、やはりパンを求めてきたそうです。仕方

がないので、今度はお餅をついて届けたところ、これにはみんな喜んでおいしそうに食べたそうです。そして、餅には、柑橘系の匂いのする黄色いネバネバしたものをぬつて食べていたと記録されています。おそらく、今で言うオレンジマーマレードを持っていましたのだと思われますが、不思議な物を付けて食べていたと感想が添えられています。

さらに、乗組員から牛肉の調達を依頼されたそうです。そもそも当時の日本人は牛肉を食べる習慣がありません。農耕用には馬を用いていたので牛そのものが身近にいませんでした。しかし、優しい下中の人々は、なんとか島中を探して牛を一頭手に入れたそうです。そして、浜の近くの丘で鉄砲を用いてと殺し、皮を剥いで木につるしてあげると、ナイフで肉をそいで焼いたり鍋料理にしたりして食べていたそうです。村人が、牛を食べるなんてなんと恐ろしいと遠目で見てみると、イギリス人たちはふざけて牛の血を塗りつけようと走って追いかけてきたそうです。

そんな日々が2ヶ月近く経過した、6月上旬にドラメルタン号の修理が完了しました。

いよいよ、その出航の前日、村人と船員とのお別れの酒宴が開かれました。その時、船長からお礼にもらつたのが、このインギー鶏です。

この鶏は、上海で英陽鶏と呼ばれていた鶏で、座礁する直前に立ち寄った上海で買い付けた鶏です。おそらく長い航海で必要な卵を得るために、船上で飼育したものと思われます。滞在した2ヶ月の間のおもてなしに対するお礼ということで11羽の鶏が贈られました。これをもらつた下中の人々は、姿形がとても珍しいこの鶏を食べようとせず、出来事の伝承と共に記念に残そうと考えました。他種と混血することなく128年もの間大切に受け継がれた貴重な生き証人となっています。

実は、この種の鶏は、現在中国では絶滅しており、世界でもこの下中にしか存在しない貴重な種となっています。このことが一つの根拠となって、現在、鹿児島県の天然記念物に指定され、南種子町内に保存会もあつて大切に種の存続が守られています。

ここ、花峰小学校でも昭和56年から保存会に所属し、子供たちが当番で毎日大切にお世話をしています。

Welcome to Hanamine Elementary School!
I am the principal (vice principal) of this school.
Thank you for coming here today.

I would like to talk about why chickens raised at a small elementary school in a rural area attract so much attention.

Please take a look at this picture.

It was taken 128 years ago, on the night of April 25, 1894 (Meiji Era 27). At midnight on April 25, 1894, a British sailing ship ran aground at Maenohama, the beach on the south side of Shimonaka.

This is a photo of the British sailing ship, the Drummeltan. Its records show that the Drummeltan was a merchant ship with s homeport in Liverpool, England. It sailed around the world. In fact, it left England in July 1898, crossing the Atlantic Ocean to New York.

It crossed the Atlantic again, rounded the Cape of Good Hope on the African continent, and sailed into the Indian Ocean. The crew passed through the Straits of Malacca and arrive at Shanghai. They stayed in Shanghai for two weeks to replenish their supplies. Then they set sail for San Francisco, U.S.A., on April 11, 1894.

The fateful day had come. On the morning of April 25, Tanegashima was hit by a spring storm. Strong winds and rain were blowing, and high waves were crashing on Maenohama all day long.

In the evening, the strong winds and rain became weaker and weaker. A young man from the village, Habu Kasuke, was on duty at the salt bonfire. At 11:00 p.m., he saw fireworks offshore, a short distance from the beach. The fireworks illuminated a ship he had never seen before, and it was leaning over as if to lie flat on its side. The ship was 12 meters wide and 81 meters long. This was the first time the Shimonaka people - did not have a port - saw such a foreign ship.

The young man, Kasuke, realized that this was a serious incident. He went to the community center in the village of Madokoro and blew high into the

air with his trumpet shell reserved for emergencies. He told the village elders who had gathered the situation. They discussed and decided that three young men should be sent to the ship as representatives of the village to see what the situation was, and if necessary, to rescue the crews with all the villagers' help.

Thus, the three young men, including Kasuke, swam to the ship and made a written conversation in Chinese characters with a Chinese man who happened to be on the ship. He told them that the ship was a British merchant ship and had run aground in a storm. The bottom of the ship was partially broken.

When the villagers were informed of this, they held a meeting again, and they decided to unload the cargo onto the rocks, pull the ship onto the beach, and repair the ship. They also decided that the crews would stay at the villagers' houses until the ship was repaired.

This is a photo of Shuemon Saikawa who was the leader of this discussion. He said, "In times of trouble, it doesnot matter if you are Japanese or a foreigner. Nothing is more precious than human life. We must go to help them."

The ship's cargo was unloaded by all the people from the three villages of Shimonaka, Nishino, and Kukinaga, and they started to repair the ship.

The crew of the Drummeltan stayed at the villagers' houses.

It was, as it were, a homestay. They did not know the manners of a Japanese house. They went into the house with their shoes on and sat down in the alcove because there were no chairs.

They could not communicate with each other, and they were not able to get to know each other in the beginning. However, this kind of thing is the same now as it was in the past. One day, a party was held on the beach. While everyone was being reserved, a housewife who lived in Madokoro spoke to the crews without fear. The people around her were surprised and worried about her behavior, but as a result, they began to laugh at each other. The party became fun and it made their relationship closer.

One day, the crews ran out of flour and they could not make bread. They asked the villagers for bread, but there was no way they could find such bread in Shimonaka. The villagers made onigiri (rice balls) and delivered them. However, the rice balls were not good for the crew and they asked for bread. Having no choice, they made mochi and the crew ate them. The crew really liked them. It is recorded that the rice cakes were covered with a yellow sticky substance that smelled of citrus fruits. Perhaps they had what we would now call orange marmalade, but the impression was that they ate it with something strange on it. Furthermore, the crews asked the villagers for beef. In the first place, Japanese people at that time did not have a custom of eating beef. Horses were used for farming, so there were not any cows around. However, the kind Shimonaka people managed to search all over the island and got a cow.

They killed it with a gun on a hill near the beach, skinned it, hung it on a tree, and ate its meat with a knife, roasted or cooked in a pot. As the villagers looked on from a distance, thinking about what a horrible thing it was to eat a cow, an English person jokingly ran after the villagers, trying to smear cow blood on them. After nearly two months of such days, the Drummeltan was completed in early June.

Finally, on the day before the ship's departure, a farewell party was held for the villagers and the crews.

At that time, the captain gave the villagers this Ing'y Chicken as a thank-you gift.

This chicken was called a Ying Yang chicken in Shanghai, and the crews bought it in Shanghai, where they stayed just before Drummeltan ran aground. It was bred to get the eggs needed for the long voyage. The eleven chickens were given as a gift of appreciation for the hospitality during the two months.

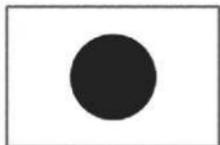
The people of Shimonaka who received them did not want to eat the chickens, which were very unusual in appearance, and wanted to keep

them as a memento, along with the tradition of the event. These are a precious living witness that has been carefully passed down for 128 years without mixing with other species.

In fact, this species of chicken is now extinct in China and only exists in Shimonaka.

This is one of the reasons for the existence of this species of chicken. This is one of the reasons why it is now designated as a natural monument of Kagoshima Prefecture, and there is a preservation society that carefully protects the survival of the species.

Hanamine Elementary School also has been a member of the preservation society since 1981. Hanamine students are on duty every day to take good care of these memento birds.



編集後記

下中郷土カルタの中には一度聞いただけでは、その意味が分かりにくかったり、郷土資料やネット等にも載つていなかつたりする言葉があります。例えば、「水井戸」がそれです。下中の方でも限られた方しか知らない場所であつたため、その意味を調べるのに時間を要しました。詳しくは本文に書きましたが、とても神秘的で魅力的な場所でした。竜宮に繋がるというおとぎ話への連想は私の中で納得できるお話をしました。

このように、原稿を仕上げる過程では実際に現地に赴き、取材したり地域の古参にお話を伺つたりしなければ解明できない内容も多かつたわけです。そうした中で、こんなことがありました。それは、郷土カルタに取り扱われていないが、後世に残したい生活文化が他にもあることを知れたことです。いくつかありますのが最も貴重な話は、聞語川の河口付近の山肌をくり抜き、その中で火を炊いて蒸し風呂にして入浴していた「岩穴（いわな）のウトウラ」です。とても貴重な情報でした。今回、このようにして集めることができた情報を文字にして残せたということは、私にとつても大変嬉しいこととなりました。

このように、数々の情報を提供してくださり、時には現地にまで案内してくださるなどしてご教授くださった寺内昭徳さんと寺内トメ子さん、子供時代の記憶を辿り、親身に相談にのつてくださった岩坪和徳さん、古市義朗さん、羽生満久さん、柳田和則さん、伝統芸能に精通しておられ、歌詞などを正しく教えてくださった岩坪順さん、種子島の食文化について教えてくださった篠山りえ子さん、日本語の文章を英訳してくださった南種子中学校の大堀聖典先生、史実に基づいて原稿を正確に点検してくださった南種子町社会教育課石堂和博文化係長さんは大変お世話になりました。みなさんに、心から厚くお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

参考文献

- 南種子町郷土誌 . . . 南種子町
- 南種子町の民俗 . . . 南種子町教育委員会
- 種子島風物誌 . . . 下野 敏見
- 種子島民俗(第20号) . . 種子島科学同好会

印刷 . . . 寺田印刷